様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４５１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１２９２

研究課題名（和文）日本の伝統と文化の教育充実を図る和文化融合型舞踊教育モデル開発－伝統舞踊とダンス

研究課題名（英文）Dance education merging with Wa culture to enrich Japanese traditional education and culture: Investigating traditional dance and school level dance

研究代表者
畑野　裕子（Hatano, Yuko）

神戸親和女子大学・発達教育学部・教授

研究者番号：８０１６７５８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本の伝統と文化の教育の充実を図るために、現代のダンスの授業を再検討し、和文化の要素（日本における伝統的な舞踊や動作等）を融合して、舞踊教育を検討することであった。文献資料の検討に加え、大学生や大学院生を対象とした授業実践、小学生を対象とした質問紙調査や教師に対するインタビューにより検討した。研究成果は、学会発表等により公表した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to consider dance education and enrich Japanese traditional and cultural education. Reconsidering the present dance class and merging the Wa culture essence, which include Japanese traditional dance and movement. The study was conducted by consideration of document material, the class practices for university students, graduate students, and a survey for elementary school students and interviews for teachers. The results were reported at conferences and in an academic journal.

研究分野：教科教育学

キーワード：日本の伝統と文化　伝統舞踊　ダンス

１．研究開始当初の背景

平成20年の学習指導要領の改訂において、中学校の体育科で、武道とダンスが男女とも必修となり、両者に対する教育の重要性が強調されていることは言うもでもない。武道は、日本の伝統に関わる身体文化を背景としており、これまでも単に身体運動としてだけではなく、日本の伝統文化を加味した体育科の領域として多くの研究や実践報告がなされてきた。

一方、ダンスの学習指導内容や方法に関する研究も様々なアプローチが試みられているが、日本の伝統文化を背景としたダンス教育に関する研究は極めて限定的である。その理由として、学習指導要領で取り上げられている伝統舞踊はフォークダンスとしての日本民踊のみであり、邦舞の古典舞踊等、日本の伝統舞踊に関しては、学習指導要領の内容でないため、その実践的な研究報告は、わずかである。

近年の日本社会のグローバル化への対応を目指す学校教育の現場では、「総合的な学習の時間」における国際理解教育、海外修学旅行や国際交流活動等において、日本人として、日本の伝統文化に関する様々な知識や経験が今まで以上に重要になってくると思われる。そのような学習対象の一つに舞踊・ダンスが含まれることは、言うまでもない。しかしながら、残念なことに、伝統舞踊の専門家と現代のダンスの専門家においては、学校教育の枠組みの中では連携が容易でなく、総合的な検討に至っているとは言えない現状がある。

以上のような背景に基づき、本研究を試みるに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本の伝統と文化の教育の充実を図るために、現代のダンスの授業を再検討し、和文化（日本における伝統的な舞踊や動作等）を融合して、舞踊教育を検討することであった。

３．研究の方法

本研究での具体的な研究計画・方法は３カ年にわたり、本研究課題を達成すべく、年度ごとに、前年までの研究成果を反映させながら展開した。

(1) 文献・資料によるアプローチ

「日本の伝統と文化に関する教育」、「伝統舞踊」、「現代のダンス」と、それらの学習内容や指導法、教材等に関連する研究について、国内・国外における文献、研究論文、学会等における研究発表資料について収集した。

(2) 実践的検討

「日本の伝統と文化に関する教育」、「伝統舞踊」、「現代のダンス」等に関連する実践事例の検討を試みた。

４．研究成果

(1) 平成26年度

まず、「日本の伝統と文化に関する教育」、「伝統舞踊」、「現代のダンス」と、それらの学習内容や指導法、教材等に関連する研究について、国内・国外における文献、研究論文、学会等における研究発表資料について収集した。主な結果をまとめると、次のようであった。

平成 20 年の学習指導要領の改訂において、中学校の体育科で、武道とダンスが男女とも必修となり、ダンス教育はより重要となっている。学習指導要領のダンスの主な内容（創作ダンス、現代的なリズムのダンス、フォークダンス）に関する研究は、 学習指導方法等の実践的なアプローチにより数多くなされている。しかし、学習指導要領に掲げられている「その他のダンス」に関する研究は、あまりみられない。

一方、伝統舞踊や民族舞踊等を授業で試みた事例が、近年の学会シンポジウム等で報告されている。しかしながら、日本の伝統舞踊に関連するものは、現在学習指導要領においては、民踊以外には取り扱いが示されていない。したがって、それら伝統舞踊や民族舞踊等の研究成果を最大限に生かすことが課題になると思われる。そこで、学習指導要領で取り上げられている「総合的な学習の時間」に関する報告に関して、レビューを試みた。その結果、国際理解に関する国際交流活動において、インターネットを用いて海外の学校と交流し、互いに歌やダンスを披露している学校教育現場における実践報告がみられた。このように、ダンス・舞踊による文化交流を想定すると、これらの知識や経験がますます重要になってくると思われる。

さらに、学習指導要領の体育の目標には、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる」ことが掲げられている。したがって、生涯教育におけるダンスの実施を促すためには、多様なダンス経験が必要と思われ、今後の研究の蓄積が期待される。

また、日本の文化、特に伝統文化の一つとして、日本舞踊に関連する実践について、大学院生を対象とした事例をあげて、検討を試みた。

これらの研究結果については、国内外の学会において発表した。

(2) 平成 27 年度

まず、初年度収集した資料等をもとに、その後に発表された新たな資料をさらに追加収集した。

前述したように、平成 20 年の学習指導要領の改訂において、ダンスは中学校で男女必修となり、ますます重要な学習指導内容となっている。身体表現活動は、校種により領域名称が異なり、小学校では表現運動、中学校・高等学校・大学ではダンスと称されている。しかし本研究では、それらを包括して舞踊（ダンス）として述べる。

平成 27 年度は、舞踊教育を検討する際に必要な舞踊（ダンス）の授業を取り上げた。特に中学校ダンスの必修に繋がる小学校において、「表現運動・表現」の指導が困難な理由を検討した。その要因としてあげられる児童の「恥ずかしさ」に注目し、その軽減を目的とした事例の分析を試みた。

具体的には、小学校５・６年生を対象とし、「恥ずかしさ」を軽減することを目的にした授業について、授業前・後の調査（「恥ずかしさ得点」）について検討した。その結果、両学年ともに、導入から設定した「恥ずかしさ」を軽減する授業案（イメージ課題と運動課題等を学習内容とした学習指導過程）が、条件の限界はあるものの、「恥かしさ」を軽減することに寄与したと推察された。

また、舞踊（ダンス）に関わる活動として、運動会のダンスや集団演技等があげられる。そこで、それらに着目して事例的に取り上げた。実践に関わった小学校教師へのインタビューの結果、表現を中心とした実践がある一方、表現と称するものの、振付けられた体操やマスゲーム、よさこいソーラン等がみられることを報告した。

これらの研究結果については、国内外の学会において発表した。

(3) 平成 28 年度

まず、初年度・次年度に収集した資料等について、さらに追加収集した。

その結果、初めてダンス指導を行う教師にとっても取り組みやすいダンス教材に関して再検討する必要があると思われた。そこで、中学生や高校生を対象としたダンス教材に関して、実践研究資料を中心に検討した。

一方、日本の伝統的な身体表現に関してみると、学校教育におけるダンスの中で、純粋な伝統舞踊の学習指導は、日本の民踊以外は、指導要領の内容として示されていない。そこで、学習指導要領における直接的な学習内容ではないものの、日本古来の身体技法に関わる丹田という概念や、西洋の科学的な解剖学とは異なる観点から「からだ」をとらえ提唱されている「合理的自然の動き」に着目した。

そして、大学生を対象として、このような西洋のダンスとは異なる身体観を加味した授業の検討を試みた。その結果、今まで経験したことの無い動きや知らなかった知識等、西洋のダンスとは異なる身体の使い方、日本の文化に関連したことを知ることができた等の回答が得られた。

これらの研究結果については、海外の学会において発表した。

以上のように、本研究では、日本の伝統と文化の教育の充実を図るために、現代のダンスの授業における学習指導内容や指導法、教材等を再検討し、さらに、日本における伝統的な舞踊や、西洋のダンスとは異なる動作等を検討した。特に、日本の伝統舞踊に関しては、学校教育における実践が数少なかった。今後、関連領域を含め、理論的・実践的な検証の積み重ねが重要と考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）

(1) 畑野 裕子、体育科の学習指導内容と指導法に関する一考察―中学校・高等学校のダンス授業における新聞紙を用いた実践報告を中心に―、ジュニアスポーツ教育学科紀要、審査無、5、2017

〔学会発表〕（計　5　件）

(1) Yuko Hatano・Motoko Kuyama, Recent Research Trends in Dance Education in Japan and Future Outlook, World Dance Alliance (WDA) 6‐11 July 2014 - Angers - France Contemporising the past: Envisaging the future （2014 年 7 月 8 日）, University of Angers：Angers・France

(2) 畑野 裕子、「日本文化身体教材」としての日本舞踊の実践事例、日本体育学会第 65 回大会スポーツ人類学（2014 年 8 月 27 日）査読無、岩手大学：岩手県・盛岡市

(3) Yuko Hatano, Dance Performance on a Sports Day in Japanese Schools, 2015/06 The 20th Annual European College of Sport Science Congress,

（2015 年 6 月 24 日）Clarion Hotel & Congress Malmö Live： Malmö・Sweden,（ Congress Institutions ： Malmö University, University of Lund, University of Copenhagen）

(4) Yuko Hatano・Motoko Kuyama, A Challenge to Improve Educational Efficacy of Expressive Activity Lessons in Japan in order to Reduce Students Shyness, 2015/09 The 2015 International Conference for the 35th Anniversary of the Japanese Society of Sport Education AND the 4th East Asian Alliance of Sport Pedagogy Conference,（2015 年 9 月 19 日）日本体育大学：東京

(5) Yuko Hatano・Rumi Otake, Practicing Consideration about NOGUCHI TAISO; Case Study in a Workshop of Female College Students, The 21st Annual European College of Sport Science Congress,（2016 年 7 月 7 日）The Austria Center Vienna：Vienna・Austria,（ Congress Institutions ： The University of Vienna・The Centre for Sport Science and University Sports）

〔図書〕（計　0　件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
畑野　裕子（HATANO, Yuko）
（神戸親和女子大学・発達教育学部・教授）
研究者番号：80167585